

熊谷市立江南文化財センター テーマ展

わが街熊谷遺跡めぐり

下本郷遺跡出土遺物展

～今井地区に地下深く眠っていた古代の集落跡～

会期：令和4年10月11日(火)～令和5年4月8日(金)

発掘現場から

文化力
POWER OF CULTURE

1 はじめに

平成28年度、市内今井にあります^{しもほんごう}下本郷遺跡の範囲内で個人専用住宅建設に伴う発掘調査が行われました。下本郷遺跡では、これまで発掘調査が行われておらず、今回の調査により初めて古代(平安時代)及び近世(江戸時代)の人々の暮らしについて考える手がかりを得ることができました。

調査では、上下2つの文化面が確認され、地表面下約80cmの上面では17世紀後半～19世紀の生活痕跡が、また、地表面下約130cmの下面では9世紀の竪穴建物跡等で構成される集落跡が発見されました。

この度は、発掘調査により発見された、律令体制下の古代の竪穴建物跡等から出土した遺物を展示します。この展示を通じて、今から約1,200～1,100年前の今井地区では、どのような暮らしがあったかなどに思いを馳せ、古代の集落について理解を深めていただければ幸いです。

2 下本郷遺跡と今回の発掘調査成果について

下本郷遺跡は、荒川左岸の市北東部中央寄り、妻沼低地の標高約26.5mの自然堤防に立地する平安時代及び江戸時代(今から約1,200～1,100年前及び約350～100年前)の集落遺跡です。

調査は、遺跡範囲の南西部において実施されました。検出された遺構は、下面では平安時代の竪穴建物跡1棟及び竪穴遺構1基が、上面では江戸時代の溝跡4条や土坑2基です。

竪穴建物跡1棟は、9世紀前半に属するもので、竪穴遺構1棟は、9世紀後半に属するものと考えられます。なお、竪穴遺構は、カマド等竪穴建物の要件を確実に備えていないことから、竪穴遺構としたものですが、竪穴建物の可能性も捨て切れません。

一方、溝跡4条は、いずれも概ね東西方向に流れ、互いに並行しています。そして、土坑は、溝跡と重複している状況でした。

出土遺物は、9世紀前半に所属する竪穴建物跡では、土師器^{はじまつき}環・甕^{かめ}・台付甕^{つきかめ}、須恵器^{すゑき}蓋^{ふた}・坏^{わん}・埴^は・甕^{つぼ}・壺^{どすい}、土錘^{つづみ}、石製紡錘車^{せいはりぼうすいしゃ}等多くの出土遺物が見られ、特殊なところでは、須恵器^{すゑき}埴^はを転用した硯^{すずり}が出土しています。ま



調査地点及び周辺遺跡分布図

た、9世紀後半の竪穴遺構では、数量こそ少ないですが、やはり土師器坏・甕・台付甕、須恵器蓋・坏・甕のほか、砥石が出土しています。

なお、竪穴建物跡の出土遺物を見ますと、6世紀後半の土師器坏、7世紀末～8世紀初頭の須恵器蓋、8世紀前半の須恵器坏・壙、8世紀後半～9世紀初頭の須恵器蓋・坏が混入し、竪穴^{としい}建物が示す時期より幅広い時期で、また概ね1世紀遡るものがあり、これらが示す時期の遺構（集落等）が近隣にあることが推測されます。

この度は、多数出土した遺物のうち、9世紀代の第1号竪穴建物及び第1号竪穴遺構の出土遺物を展示しました。

3 展示資料を出土した遺構について

(1) 第1号竪穴建物跡（SI1）

調査区の中央南半部において、建物の一部が検出されました。東を第1号竪穴遺構に、南を江戸時代の溝跡（SD4）に切られ、設置されていたであろうカマドは、確認されませんでした。

遺物は、建物のプランの中ほぼ満遍なく出土しましたが、特に南端付近に集中していました。

時期については、第2章のとおり本建物が属する時期以外の6世紀後半～9世紀初頭、及び9世紀後半の遺物も多数含まれていましたが、第1号竪穴遺構との関係等を踏まえ、9世紀前半と考えられます。

(2) 第1号竪穴遺構（SX1）

調査区の東半分の大部分を占めます。建物の北及び東は、調査区域外にあり、南は江戸時代の溝跡（SD4）に切られています。カマド状の掘り込み、床面に3基のピット（小さい穴）を確認し、前者をカマド、後者を柱穴とすれば竪穴建物ですが、その確証には乏しく竪穴遺構としました。

遺物は、遺構の中央部付近に点在して出土し、出土量はさほど多くありませんでした。

時期については、第2章のとおり第1号竪穴建物跡とは異なり、8世紀後半～9世紀初頭の遺物の混入が多少見られましたが、出土遺物の大半を占める時期の9世紀後半と考えられます。

4 おわりに

下本郷遺跡が所在する今井地区は、調査例が極めて少ない地区であると同時に、遺跡の存在を確認することすら難しい場所です。つまり、荒川の旧流路によって形成された自然堤防が点々とある場所で、現在でもこの微高地を利用した集落が所在します。では、なぜ遺跡がなかなか発見されていないのかと言うと、複雑に入り組んだ湧水地、旧河道、自然堤防が形成されている土地で、河川の氾濫等によって砂・シルト・粘土層が幾重にも

厚く堆積し、その結果、遺跡を地中深く眠らせてしまっているからです。

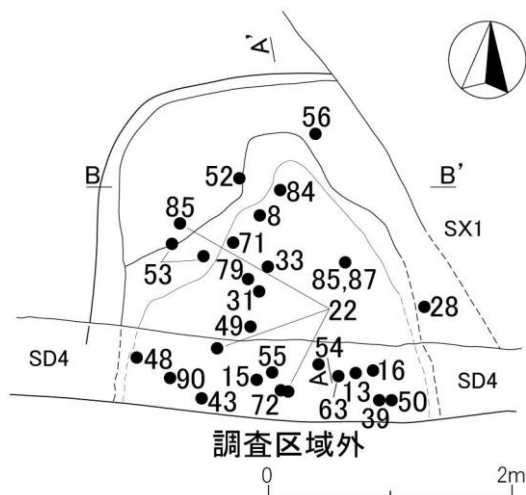
このような状況の中、今回の調査では、古代・平安時代の集落の状況の一端を知る情報を得ることができました。それは、主に平安時代・9世紀の人々の暮らしの一端を垣間見ることができ、点在する自然堤防という当時からやや高い地形という住みやすい場所を選んで、集落を形成していたことが分かったことです。その集落の時期は、国家的な施策である律令体制下の平安時代のうち、約100年間という短い時間でしたが、出土遺物を見ると、古墳時代後期～奈良時代に属するものもあり、すぐ西には古墳時代中期に遡る可能性がある古墳時代後期の集落（東浦遺跡）が、また、少し離れますが、東や南東には古墳時代中期から平安時代そして中世まで続く集落（中条遺跡・北島遺跡）が発見されており、極狭い範囲の調査であった本遺跡においても、他の箇所において前後の時代の集落跡が発見される可能性を秘めています。



調査区全測図



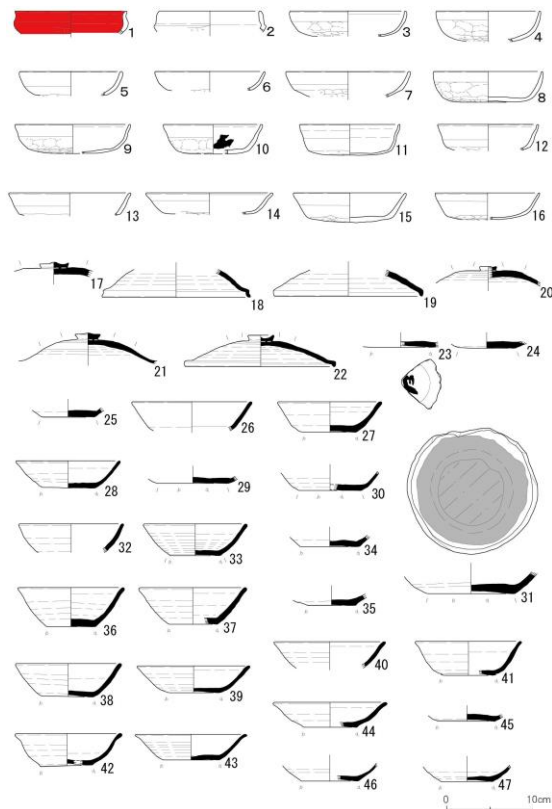
第1号竪穴建物跡(右上)、第1号竪穴遺構(手前)



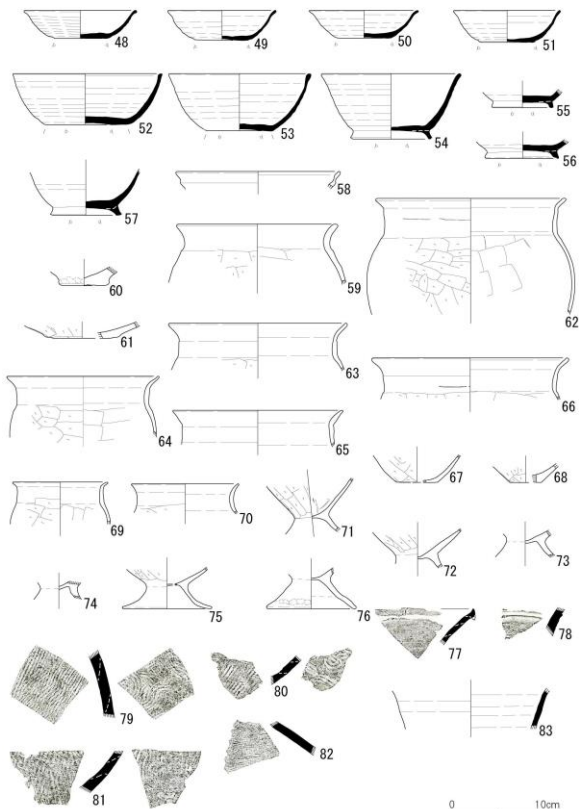
第1号竪穴建物跡・出土遺物分布図



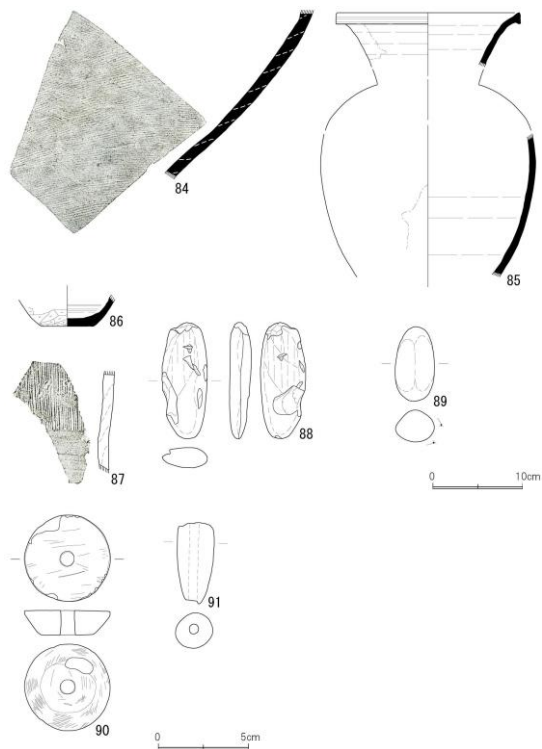
第1号竪穴建物跡 遺物出土状況



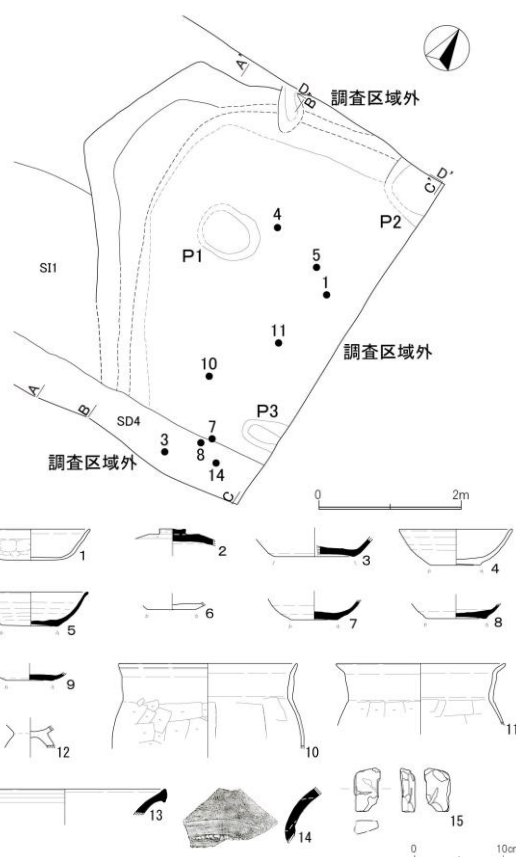
第1号竖穴建物跡出土遺物(1)



第1号竖穴建物跡出土遺物(2)



第1号竖穴建物跡出土遺物(3)



第1号竖穴遺構・出土遺物分布図(上)、出土遺物(下)

令和4年(2022)10月11日発行

編集・発行：熊谷市立江南文化財センター(熊谷市教育委員会 社会教育課 文化財保護係)